

『別雷社歌合』注釈(二)

著者名(日)	武田 元治
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	39
ページ	23-50
発行年	2007-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00003380/



『別雷社歌合』注釈(二)

武田元治

前稿で「霞」の題の三十番をとり上げたのに続いて、本稿では「花」の題の三十番をとり上げる。この一番から二十番までは、『平安朝歌合大成』に甲本として挙げられる伝寂蓮筆本の一部が残されており、その本文の方が優れていると思われる場合が少なくない。その点に留意しながら見てゆきたいと思う。

花

一番 左

隆季

61 おぼつかな花なき里のさと人は春のころやのどけかるらん

観蓮

ちりぬとも(伝寂蓮筆本、以下同シ)
62 ちりぬとていかが帰らん山桜あかぬ名残の花の木かげは

観蓮

左歌、春の心はのどけからましといへるうたの上の句ばかりかはれるかなるべし。かかるやうにとりてはをかくも侍れど、あまりにやあらん。

右歌、花の木かげはといひいひはてたるてはてたる程ぞ、優にしもきこえねども、花のちりなん木のしたに猶名残こひたる心、よろしきにやあらん。よりにて右の勝と申すべきにや。

【通釈】(伝寂蓮筆本によって記す。)

花

一番 左

隆季

61 どうも気にかかる、——花の咲かない里の里人は、春の心はのどかなのだろうか。

右勝

観蓮

62 花が散ってしまっても、(ここを離れて) 帰る気にはなれぬ、——山桜の、見飽きず心に残る花の木陰は。

左の歌は、「春の心はのどけからまし」と(業平の) 詠んだ歌の上の句だけが違っている作でしょう。こういう詠み様の歌としては面白くも見えますが、(本歌の表現のとり入れ方に) 度を越えた点があるうか。

右の歌は、「花の木かげは」と言い切っているあたりは、優美とは思われないけれど、花の散った木の下で、なお残る花の面影を慕った心は、評価されるであろう。それで右の勝と言うべきかと思う。

【注】○ちりぬとて「ちりぬとも」と伝寂蓮筆卷子本にあり、作者の家集『貧道集』も同じ。○春の心はのどけからましといへるうた『古今集』(五三三) に見える在原業平の歌の下句を引いたもの。上句は「世の中にたえて桜のなかりせば」。この歌は『伊勢物語』八十二段等にも見える。

【考察】左の歌は、在原業平の歌、

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(『古今集』五三)

を本歌として、それでは「花なき里の里人」は春に心がどかなのか、「おぼつかな」と詠む。「花なき里」を詠み入れた歌は、伊勢の、

春がすみたつを見すててゆかりは花なき里に住みやならへる（古今集）三二）

などがあるが、この左歌では「花なき里」の「里人」の心にまで立ち入って想像し、心穏やかでいられるのかどうか、気がかりだとする。これは作者の世を生きる上での悩みを反映したところがあるうかと思

う。右の歌は、山桜の散った後も心に残る花の面影が忘れ難く、木陰を離れたいと詠んでいる。花に引かれる伝統的な心を強調して詠んだ一首である。

俊成の判詞は、左歌については、業平の歌の下句をあまり変えないで用いた点を問題として、「をかしく」も思われるが、下句の類似は度を超えているようだ」と批判する。

右歌については、末句の表現が優美と思われなと言いなながらも、花の散った後もその名残を思う心を「よろしき」ものと評価し、勝と

二番

左持

63 桜花ちりなん後のすがたをばかはりてみせよ（伝寂蓮筆本、以下同之）

実房

右

讃岐

64 咲初めてわがよにちらぬ花ならばあかぬ心の程はみてまし

左右ともにすがた詞いとをかしくこそ侍るめれ。但、左はかはりてみせよ（みせよと云心や）といへらんや、いかが。雲は花の前後おなじくや侍らん。

右は、わがよのこと葉、誰もよむことには侍れど、歌合の時はいかにぞや、ようお願いあるべく見え侍るなり。持とすべし。

【通釈】

二番

左持

実房

63 桜の花が散った後の、その姿を、（花に）代わって見せてくれ、峰に

かかる白雲よ。

右

讃岐

64 咲き初めてから、私の生涯にかけて、もし散らない花だったら、見飽きない気のまま、眺め続けていたいものです。

左右の歌は、ともに姿や言葉が大層面白い作のようです。ただ、左の歌は、雲に対して（花の散った後の姿を）「代はりて見せよ」と詠んでいるようだが、これはいかがであろうか。雲は花の前も後も同様の姿だろうかと思うのです。

右の歌は「わが世」という言葉を用いているが、これは一般にそのように詠んでいることですが、歌合の場合にはいかがなものか、配慮する必要があるかと思われるのです。持と判定しよう。

【注】○ちりなん後のすがたをばかはりてみせよ 伝寂蓮筆本では「ちりなん後のかたみにはかはりてみせよ」とある。「すがたをば」だと、花の散った後の姿を見せよと雲に求めたことになる。「かたみには」と、花の散った後に花の思い出になる姿を見せよと雲に求めたと言う方が、納得される表現かと思われる。ただし、俊成が判詞で批判しているのは、「すがたをば」の形の場合のようなので、それが右歌の本来の形であったのではないか。一首は『月詠集』（二三三）にも「すがたをばかはりてみせよ」の形で収められている。○わがよ 自分の一生の間。

【考察】左の歌は、花の散った後に花の思い出のよすがとなる姿を見せよと、峰の白雲に求めた心であろう。ただその場合、「散りなん後の姿をば」代はりて見せよ」というのは、「注」で触れたように疑問のある表現で、俊成の判詞でも批判している。

右の歌は、もし花が自分の一生の間散らずにいてくれるなら、見飽きず見続けていたいと詠む。花が見飽きぬうちに散るのを嘆く心を、こういう形で歌ったのであろう。

俊成の判詞は、左右の歌はともに姿、言葉が「いとをかしく」詠まれていると評価した上で、それぞれの疑問点も指摘する。左の歌につ

いては、花の散った後の姿を花に代わって見せよと雲に求めているが、雲は花の前後を通じて同様の姿であるはずだと言う。

右の歌については、「わが世」の語を、歌合の歌という観点から問題視している。「わが世」は作者個人の一生を意味するから、公的な歌合の場では避けるべきだと見たのである。

【備考】二番右歌は『続後拾遺集』雑歌上（九九九）に収められている。

三番

左持

65 神がきやみしめのうちの桜花あらし風にはあたらじものを

実国

右

登蓮

66 としごとにそむる心のしるしあらばいかなる色に花のさかまし

左の歌、みしめの内の花、あらし風にはなどいへるころ、をかしく侍り。

右は、いかなる色に花のさかましといへる姿、いとをかしく（伝寂蓮筆）つね（以下同）の花の色にはそめまざるにやとみえ侍れど、みしめのうちの花はあだならず侍れば、持と申すべし。

【通釈】

三番

左持

実国

65 神域の、標繩しめをめぐらした中の桜の花は、荒い風に当たることはあるまいと思う。

右

登蓮

66 毎年花に心を染める（心を深く寄せる）が、これにもし効験があるならば、一体どんな色に花が咲くだろうか。

左の歌は、「み標しめの内の花」について、「あらし風には（あたらじものを）」などと詠んだ心が、面白く思われます。

右の歌は、「いかなる色に花のさかまし」と詠んだ姿が、大層面白い。普通の花の色にまさって染められるか（そして歌もまさっているか）と思われませんが、左の歌の「み標しめの内の花」は（神域内の花で）、かりそめのものではないのですから、持と致しましょう。

【注】○神がき 神域を他と区別する垣だが、神域を指しても言う。○みしめ 「み」は、敬意を添える接頭語。「しめ」は、しめ縄。神域を示すしるしとして引き渡す縄。○そむる心 染むる心。深く寄せる心。

「染む」は、色がしみこむように深く思い入れる意。○しるし 効験。はたらきかけに応じて現われる結果。○つねの花の色にはそめまざる花が普通の花の色にまさって美しく染められる意に、歌が他より一層まさっている意を含めて言ったものであろう。

【考察】左の歌は、しめ縄をめぐらした神域の内の桜の花は、外部の荒い風から守られて美しく咲くことであろうとの心を詠む。神域の花への賛歌である。

右の歌は、花に思い入れる心を「染むる」心と言うことから、もしその効験があるなら花はどんな色に染まって咲くことかと詠む。「染むる」の語をキーワードにして想像の面白さを求めた作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、心が「をかしく」思われると評する。右歌については、「いかなる色に花のさかまし」と、人の思いで染まる花の色を想像した詠み様を「いとをかしく」と高く評価している。

【備考】三番右歌は『新後拾遺集』（九一）に収められている。

四番

左

時忠

67 一とせをさながら春になしはててたえず桜をみるよしもがな

右勝

俊恵

68 雲かかるたかねの桜ちりぬれば（伝寂蓮筆本、以下同）さきをこゆるあまの河波

左、彼の和泉式部がおしなべて春は桜になしはててちるてふ事（この）なげかずもがなといへる歌にかよひて、さながら春にとおき、たえず桜をなどいへる心、をかしくこそ侍れ。

右の歌さまは、いとをかしく侍るなるべし。但、あせきをこゆるといへるにや、山の高ねぞみせきと見むこと、いかがとおぼえ侍らん。高陽院家の歌合に、雲ぬにみゆる滝のしらいなどいへる歌（この）こそ、誠にさることをかしくは侍れ。されどこれもかれもたけ

あらんとよめる歌に侍るめり。右あまの河波、少しは立ちまさるにや侍らん。

【通釈】（伝寂蓮筆本によって記す）

四番 左

時 忠

67 一年をすべて春にしてしまつて、絶えず桜の花を見るすべがないものかと思う。

右勝

俊 恵

68 雲のかかる高ねの桜が咲いたので、天の川の波が、せきを越えてあふれ出たと見えた。

左の歌は、和泉式部が、「おしなべて花は桜になしはてて散るてふことのなからましかば」と詠んだ歌に通じるところがあつて、「さながら春に（なしはてて）」と言つた上で、「たえず桜を（見るよしもがな）」と詠んだ心が、面白く思われます。

右の歌は、歌い様は大層結構なものでしょう。ただ、「みせきを越ゆる」と詠んだのは、山の高い峰を河のせきと見なすわけで、これはどうかと思われれることでしょう。あの高陽院家の歌合に、「（山桜さきそめしよりひさかたの）雲ぬに見ゆる滝の白糸」と詠んだ歌などは、まことにしかるべきことと面白く受けとれるのですが。しかしこの右歌も格調の高さを心がけて詠んだ歌のようです。この右の「天の河波」の歌が、少しは立ちまさつてゐるだろうかと思ひます。

【注】○ぬせき 用水にするため川をせき止めた所。○あまの河波 天の川の波。大江匡房の歌に「初瀬山くもぬに花のさきぬればあまの川波たつかとぞ見る」（『金葉集』五一、『江師集』三三三では第一句「をはずせや」、第三句「さくころは」とある。これは山の高い所に花が咲いたのを、天の川の白波に見立てている。一方『江師集』には「吉野山くもるに花のちるころは天の川波かけぬ日ぞなき」（四〇八）と、山の高い所に花の散るころの様子を天の川波に見立てた歌もある。○和泉式部が、おしなべて… この和泉式部の歌は、伝寂蓮筆本に挙げる

「おしなべて花は桜になしはててちるてふことのなからましかば」の形が『和泉式部集』（正集、榊原本、三三七）に見られる。これに対して第二句を「春は桜に」とする形が『和泉式部集』松井本（一八九）に見られ、「春を桜に」とする形が『続後撰集』（八五）の和泉式部の歌に見られる。しかし下句を「ちるてふ事をなげかずもがな」とする形は目下見いだすことができない。○高陽院家の歌合に、雲ぬにみゆる滝のしらいとなどいへる歌 この歌合は、寛治八年（一〇八四）、前関白藤原実が高陽院第で催した『高陽院七番歌合』で、桜七番右の源俊頼の歌。ここでは下句を挙げてゐるが、上句は「山桜さきそめしよりひさかたの」。一首は『金葉集』（五〇）にも収められる。

【考察】左の歌は、一年をすべて春にして、絶えず桜の花を見ていたいと、花に引かれる伝統的な心に基づく願望を詠んでいる。

右の歌は、第三句の形が本により異なるが、作者俊恵の家集『林葉和歌集』（二三八）所収の歌の形によれば、伝寂蓮筆本の「さきぬれば」がよいと思われる。「雲かかる高ねの桜」が咲いた様子を、「天の河波」がせきを越えてあふれ出たさまに見立てている。高ねの桜の咲きさがる大景を鮮やかに表現しているが、着想や用語から見て、次の大江匡房の歌を下敷きにしたところがあるかと思う。

初瀬山雲ぬに花のさきぬれば天の河波たつかとぞ見る（『金葉集』五一、「遙見」山花といへる事をよめる）

俊成の判詞は、左の歌については、和泉式部の花の歌に通じるところがあると言ひ、その心が「をかしく」思われると評する。ただここに引かれる和泉式部の花の歌は、伝本によって形が相違するが、伝寂蓮筆本の

おしなべて花は桜になしはててちるてふことのなからましかばの歌形が、「注」で触れたように『和泉式部集』（正集、榊原本、三三七）の歌の形とも一致するので、妥当かと思われれる。

右の歌については、俊成は佳作とする一方、問題点も挙げている。それは、高ねの桜が咲いた様子を天の河波が「ぬせき」を越えたと見

立てたので、山の「高ね」を「みせき」と見なしたことになるが、不自然ではないかという指摘のようである。そして右歌と似た山桜の景を詠むが問題のない佳作として、次の源俊頼の歌を挙げる。

山桜さきそめしよりひさかたの雲るに見ゆる滝の白糸（『高陽院七番歌合』桜七番右、『金葉集』五〇）

俊成は、このような歌こそ「誠にさることとをかしく」思われると言いつ、しかし俊恵の歌も俊頼の歌と同様に「たけあらんと詠める歌」と見えると言っている。これは俊頼から俊恵に続く六条源家の歌風の色に触れた言葉として興味深い。

五番 左持

成範

69をしめどもかひなかりけり桜花かぜにのみこそさはれてゆけ

通親

70 神が神山に（伝寂蓮筆本、以下同）きにしめゆふ花は諸人の思ひひらくるかざしなりけり

左歌、すがた詞よろしくこそ待るめれ。花ををしみかねて、いかはせむと思ひなりにけるやうにぞきこえ持る。（兼ある）

右歌、思ひひらくるなどいへるわたり、えむ（兼ある）なることばにしもあらねど、しめゆふ花、おろかならずみゆ。持（兼ある）と申すべし。

【通釈】

五番 左持

成範

69 花との別れを惜しんだが、むなしなことだった、——桜の花は、風

右

通親

70 神域神山に（伝寂蓮筆本、以下同）に、大事に守られる花は、多くの人々の思いも晴れる、かざし

の花なのであった。
左の歌は、姿、言葉が結構な作のようです。花との別れを惜しむが止めることができず、仕方がないという気持ちになった様子と思われま

す。
右の歌は、「思ひひらくる」などと言ったあたりは、優美な言葉遣

【別雷社歌合】注釈（二）

いではないけれども、「（神山に）しめゆふ花」と詠んだのは、並々

【注】○神がき 伝寂蓮筆本では「神山」。神山なら、ここでは上賀茂神社の背後の山。○しめゆふ 標結（しめゆふ）ふ。占有する地を示す標識を設ける。ここでは花を大切に守る意で言ったのであろう。伊勢の歌に、「植

ゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露をもくらん（『後撰集』二八〇、『拾遺集』一六七）がある。○思ひひらくる 思いが晴れる。「ひらく」は花の縁で言う。○かざし 髪にさして飾る花や枝。植物の生命力を身につける信仰から起こり、神を迎え幸福を願う意味をもっていた。

【考察】左の歌は、花との別れを惜しむわが心もむなく、花は風にのみ誘われて散ってゆく、と嘆いた作。花や風も心をもつもののように擬人化して詠んだ点に特色がある。

右の歌は、神域に「しめゆふ花」は、人々の「思ひひらくるかざし」であったと詠む。神域の花を諸人の思いも晴れる「かざし」ととらえて賛美した作であろう。

俊成の判詞は、左歌については、「姿詞よろしく」と評価する。右歌については、「思ひひらくる」という言い様を優美でないと批判するが、神域に「しめゆふ花」を詠んだ点を挙げ、持として

六番 左持

雅頼

71 みよしのの山のあなたにちる花を吹きこす風のたよりにぞみる

右

公重

72 あかすのみおもふ桜の花かとして心にかかる峰（このもとにて）のしら雲（みたるには）（伝寂蓮筆本、以下同）

左右の花、いづれもこの本（兼ある）にてみるにはあらざれども、左はかぜのつてにもたよりにてみるなどいへり。
右はみねの白雲許を心にかけてたる様にはきこえはべり。あいなくやあらん。花かとしてなどいへるも、心すくなき心ちす。左の（兼ある）かちなるべきにや。

【通釈】（伝寂蓮筆本によって記す。）

六番 左勝

雅 頼

71 吉野の、山の向こうで散る花を、山を吹き越す風のたよりで見ると、
です。

右

公 重

72 あれは、ただもう飽きず思ふ桜の花かと思ひ、峰の白雲が心にかか
るのです。

左右の歌に詠まれた花は、いずれも木の下で見た花ではないが、
左の歌では、風という仲立ちによって、「（風の）たよりにぞ見る」
などと詠んでいる。

（それに対して）右の歌は、峰の白雲を専ら心にかけているように
思われます。これは筋の違うことだろうかと思ふ。また「花かと
て」などと言つたのも、花を思ふ心が不足している気がする。左
の勝であろう。

【注】みよしの山のあなた 吉野山の向こう側。『古今集』に「み吉
野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ」（九五〇）の
歌が見える。吉野山は、大和の国の歌枕、今の奈良県中部の山であ
るが、現在の吉野山を含む広い山岳地帯を言つたようである。○心に
かかる峰の白雲 心にかかることに、峰に白雲がかかることを掛けて
言う。

【考察】左の歌は、吉野山の向こう側で散る花を、山を越えてくる風の
たよりに見ると詠む。吉野山は奥が深く、山岳信仰の地でもあつて、
「山のあなた」は容易に近づき難いだけに人の心を引く所だつたであ
らう。そんなことを背景に置いて、「山のあなた」に人知れず散る花を
「風のたより」で見ることができたと詠んだもので、巧みな詠み様の作
かと思ふ。もつとも、吉野山の花という点を別にすれば、次のような
歌から着想を借りたとも見られる。

色深き山隠れのみぢ葉をあらしの風のたよりにぞ見る（金葉
集）六八二、長実母

右の歌は、見飽きることのない桜の花かと思つて、峰の白雲が心にか
かつたと詠む。遠山桜と峰の白雲を似たものとして見る着想は、歌
によく用いられるところである。

俊成の判詞は、題とされる花のとり上げ方に関して、左歌は、風の
運んでくる花を見ると詠んでいるが、右歌は、峰の白雲に中心を置き、
白雲を花かと思つて心にかけてたしか言っていないので、花を思ふ心
が不足していると指摘し、左の勝としている。

【備考】六番左歌は『玉葉集』（二四五）に収められている。

七番 左

実 綱

73 ときはなる松のあたりの桜花散りなん山の名をや立つべき

右勝

師 光

74 吉野山さわがぬ雲にしるきかなをのへの桜花ざかりとは

左歌、すがた詞をかしく侍り。但、これはときはの山にや侍らん。
ふるくは、ときはの山は吹く風のともいひ、よその紅葉をかせぞ
かしけるなどやうにいへるや、よろしくきこえ侍らん。山のなを
たたむ事いかが。

右歌、さわがぬ雲といへるけしきよろしく、なべてのよも風しづ
かなる心ちす。仍右の勝とす。

【通釈】（伝寂蓮筆本によって記す。）

七番 左

実 綱

73 常盤の松のあたりの桜の花は、散つたなら、常盤の山の名を揚げる
ことなるであろうか。

右勝

師 光

74 吉野山に、動かぬ雲がかかると、すぐ分かる、——あれは峰の桜が
花盛りなのだ。

左の歌は、姿や言葉が面白いとは見受けまます。ただ、ここで詠ん
でいるのは、常盤の山かと思ひます。常盤の山は、古い歌では、
「（もみぢせぬ）常盤の山は吹く風の（音にや秋を聞きわたるらむ）」

と詠んだり、「(秋くれど色もかはらぬ常盤山)よそのもみちを風ぞかしける」という風に詠んだりしたのが、結構に思われるというものでしょう。それを花が散つたら常盤の山の名を揚げるというように詠むのは、いかがであらうか。

右の歌は、「さわがぬ雲にしるきかな」と(吉野山の峰の花盛りを)詠んだ様子が結構で、広く世の中も平穏であるという気がする。そのため右の歌を勝とする。

【注】○ときは「常岩」から出た言葉で、常に変わらない意に用いられて、常緑樹の葉が秋も色が変わらないのを言うことが多い。また地名で、今の京都市右京区の双ヶ丘南西の丘陵地を言い、歌に「常盤(の)山」「常盤の森」などと詠まれるが、やはり木の葉が常緑で秋も色が変わらないイメージを伴うのが一般である。○名をや立つべき「名を立つ」は、名を揚げる意。○吉野山 六番の「注」参照。○ときはの山は吹く風の「もみちせぬときはの山は吹く風の音にや秋をききわたるらむ」(古今集)二五一、紀淑望。『拾遺集』一八九、大中臣能宣。作者名を異にして重出。○よその紅葉をかせぞかしける「秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみちを風ぞかしける」(古今集)三六二、坂上是則か)○なべてのよ 一般の世の中。

【考察】左の歌は、常盤の松の辺りの桜花は、散ると松の緑のみが残り、常盤の山の名を高めることだろうとの心と思われる。この場合、題の「花」自体を賞美する態度は乏しいと思う。

右の歌は、吉野山に「さわがぬ雲」がかかると見えるが、あれは峰の花盛りと知られる、と詠んだものであろう。遠山の花を雲と見る歌は少なくないが、一首は情景や表現が特に次の大江匡房の歌と似たところがあると思う。

白雲と見ゆるにしるしみ吉野の吉野の花ざかりかも(詞花集)

(一一)

比べると匡房の歌の方がびやかな声調をもつ点で優れているようであるが、この右歌は「さわがぬ雲」と峰の花の静かに咲き続く様子を

とらえた点に、特色があるのであろう。

俊成の判詞は、左の歌については、姿言葉が「をかしく」見えるとする一方、「常盤」の山を詠み入れた点に関して問題点を挙げている。先例として二首の歌を引いているが、二首はともに秋の紅葉を「常盤」の山に対して置き、それによって秋も色の変わらぬ常盤木の山の特色を生かそうとした作である。その伝統が左歌では顧みられていない点を、俊成は問題にしたのであろう。

右の歌については、吉野山の峰の花盛りを「さわがぬ雲」ととらえた点を評価し、平穏の世も感じさせると言い、右の勝としている。

八番

左持

75 谷風の吹上にさける花みれば(伝寂蓮筆本、以下同ジ)雲立ちのぼる高円のやま

右

大輔

76 よしの山このした月夜なくはこそ花みてくらす日をもいそがめ

左、雲たちのぼるといへる末の句、いとよろしくみえ侍り。吹上にさけるといへるや、ふき上の浜などやうなる所のあらんやうにきこゆらん。

右の、木の下月よなくばこそといへる姿、また優にこそ侍れ。日をもいそがめといへるわたりや、すこし事たらぬ様にきこえ侍らん。持と申すべし。

【通釈】(伝寂蓮筆本によって記す。)

八番

左持

実守

75 谷風の、吹き上げる所に咲いた花が散ると、高円の山に、雲が立ちのぼると見える。

右

大輔

76 吉野山で、(夜、)木の下にさす月の光がないとしたら、花を見て暮らす日も、急がしく送ることになるでしょう。

左の歌は、「雲立ちのぼる」と詠んだ下の句が、大層結構なものが見えます。(しかし)「吹上にさける」と言ったのは、吹上の浜な

どのような場所がありそうに思われるでしょうか。

右の歌は、「木の下月夜なくはこそ」と詠んだ様子が、やはり優美に見えるようです。（けれども）「日をもいそがめ」と言ったあたりは、少し表現が不完全なように思われるでしょうか。持と判定すべきかと思えます。

【注】○吹上 風が吹き上げてくる所。それが地名になる場合も多い。
○高円のやま たかまどの山。「高円」は『万葉集』ではタカマトと清音。今の奈良市の東部、春日山の東南にある山。○よしの山 六番の「注」参照。○このした月夜 木下月夜。木の下にさしこむ月（の光）。○ふき上の浜 紀伊の国の歌枕。今の和歌山市の、紀ノ川旧河口付近の浜。『公任集』に、「吹上の浜にいたりぬ。風のいさごを吹きあぐれば、かすみのたなびくやうなり。げに名にたがはぬ所なりけり。」（四四七詞書）と見える。

【考察】左の歌は、谷風に吹き上げられる花の様子が、高円山に雲が立ちのぼると見えたと思われる。花の舞い立つ山の遠景のとらえ方に特色のある作であろう。

右の歌は、吉野山で、木の間にさす月光によって夜も花見ができることを前提にして、もしその夜の花見ができないとしたら、その分だけ、花を見て暮らす日はよほど忙しいものになるだろうと想像した作かと思う。

俊成の判詞は、左歌については、風に舞い上がる花を「雲立ちのほる」ととらえた表現に対して「いとよろしく」見えると評価する。ただし「吹上」は「吹上の浜」などの特定の地名のようにも受けとられると言い添える。これは、

秋風のふきあげに立てる白ぎくは花かあらぬか波のよするか（『寛平御時菊合』八、菅原道真。『古今集』二七二）

などと詠まれて、「吹上」が歌枕としてのイメージが濃いことに基づく指摘かと思う。

右歌については、「木の下月夜なくはこそ」と詠んだのを、姿が「優

であると評価する。しかし「花見て暮らす」日をも急がめ」と詠んだあたりは、「少しことたらぬ」ように思われると言う。表現が精確でない点を批判したものであろう。

九番 左持 永範

77 心ありて花にはうつれ鶯のはふれにちるもをしき句を
右 成仲

78 春ふかく成行くままによしの山梢こそりて花咲きにけり

左歌、花にはうつれといひ、はふれにちるもなどいへるすがた、いひしりてみえ侍り。

右歌、梢こそりてなどいへる心、宜しくみえ侍れば、是も勝負難^{よりて猶為持（伝教蓮華本）}知。仍持と申す。

【通釈】 九番 左持 永範

77 心して花の枝には飛び移れ、うぐいすよ、——その羽根が触れて散るのが惜しい（花の）美しさだから。

78 春が深まるままに、吉野山は（見渡す限り）、桜のこずえがごとごとく花を開いたことだ。

左の歌は、「心ありて」花には移れ」とうぐいすに呼び掛け、「羽触れに散るも」などと詠んだ様子は、詠み様を心得たものと思われま

右の歌は、「梢こそりて（花咲きにけり）」などと詠んだ心が、結構に見えますので、これも勝負はつけ難い。そのため、やはり持とします。

【注】○はふれ 羽触れ。はばたいた羽が触れること。『万葉集』では、ほととぎすと藤の花を詠んだ大伴家持の長歌に、「羽触れに散らす 藤波の 花なつかしき」（四一九二）と詠まれ、その反歌にも用いられている。○よしの山 六番の「注」参照。

【考察】左の歌は、うぐいすに呼び掛ける形で、「心ありて花には移れ」羽が触れて美しい花の散るのが惜しいから、との心を詠む。

右の歌は、吉野山の桜が、春の深まるにつれて「梢こぞりて花咲きにけり」と詠む。平明な詠み方で、目立つ節もないようだが、滞りなく詠み下された中でも、「こずゑこぞりて」という語句は、声調美を感じさせるとともに、満山の桜が一齐に開花した様子をよく表現したものであろう。

俊成の判詞は、左歌については、その姿が「言ひ知りて」見える、詠み様を心得たものに思われる、と評価する。

右歌については、「梢こぞりて」と詠んだ心を「よろしく」見えると評価する。前記のような特長を認めたものであろう。

十番 左

79 吉野山峰にたなびく白雲の絶間やおそき桜なるらん

右勝

資隆

80 神山の榊にまじる桜花ときは色にならへとぞおもふ
（伝寂蓮筆本、
ことには待れど、
以下同ジ）

左、よしの山、峰の白雲などは、めなれたることばに待れど、たえまやおそきなどいへるころ、をかしくはべるめり。
（伝寂蓮筆本、
の歌ナシ）

右の歌、ときは色にならふと云ふ事も、つねの詞にあれど、さかきまじらん桜はナシ
（伝寂蓮筆本、
ならへなどいふことも、
つねの詞にはあれど、
さかきまじらん桜はナシ）

【通釈】

十番 左

経盛

79 吉野山の峰にたなびく白雲の、切れ目と見えるのは、（まだ花を開かぬ）遅咲きの桜であるうか。

右勝

資隆

80 神山の榊にまじる桜の花は、榊の色の変わらないのに親しみ、ならつてほしいと思う。

左の歌で「吉野山」の桜を「峰の白雲」と言うことなどは、（先例があり）見慣れた表現ですが、「（白雲の）絶え間や遅き（桜）」な

どと詠んだ心が、面白いように思います。

右の歌で、花の色は「常磐の色にならへ」などと詠むことも、普通に用いる表現であるが、榊にまじる桜の花をとり上げたのは、目新しいこととも思われるので、右の勝とする。

【注】○神山 ここでは今の京都市北区の賀茂別雷神社（上賀茂神社）の後方の山を言ったのであろう。○ときはの色 常に変わらない色。

【考察】左の歌は、吉野山に咲き続く桜の花を「峰にたなびく白雲」と見る視点から、その「白雲の絶え間」になるのは、まだ花の咲いていない遅桜であろうかと詠んでいる。

右の歌は、神山の常緑の榊にまじって咲く桜の花は、榊の「ときはの色」にならつて、その花の色を常に保ってほしいと詠んでいる。

俊成の判詞は、左の歌については、「吉野山」の桜を「峰の白雲」と言うことなどは「目慣れたることば」とする。これは例えば、

吉野山峰になみよる白雲と見ゆるは花のこずゑなりけり（金葉集）
五二、藤原忠隆

などのような先例が少なくないことを言ったのであろう。しかし、その「白雲の絶え間」を「おそき桜」ととらえた着想は「をかしく」思われると評価する。

右の歌については、花の色は「ときは色にならへ」などと詠むのは「つねの詞」だと言う。これは例えば、

花の色もときはならんなよ竹の長さよにをく露しかからば（拾遺集）一一六一、清原元輔

のような先例があるのを言ったのであろう。しかし「榊にまじる」桜をとり上げた点は「めづらしく」思われると評価し、右の勝としている。

俊成は左右ともに同様に一長一短を挙げているようだが、結局右の勝としている。これは、左歌で雲の絶え間を遅桜ととらえているのが、趣向としては面白いにしても、やや不自然な感があるところから、そういう無理のない右歌を相対的に勝るとしたものであろうか。

十一番 左持

81 日にみがかく花にたぐひて常よりも光やまさるあけの玉がき

脩範

右

頭家

82 桜花うつつばかりに散るとみば夢にはかせをうらみざらまし

左歌、日にみがかき風にみがかく花に、あけの玉がき光そふらん心、いとをかし（伝寂蓮筆本以下同）、光やといふやの字や、みずして思ひやれる心地すらん。

右の歌は、かの貫之が夢のうちにも花ぞちりけるといへるうたを思へるなるべし。夢には風をなどいへるすがた、うに待るめり。持とすべし。

【通釈】（伝寂蓮筆本によって記す。）

十一番 左持

脩範

脩範

81 日に照り映える花に合せて、社の朱あかの玉垣も、常より美しく輝くかと見える。

右

頭家

82（夢の中で）桜の花が現実と同じように散ると見ても、夢では、風をうらむことはなかるうと思う。

左の歌は、日に照り映え、風に揺られて美しい花に、朱の玉垣も光が加わるという着想が、大層面白い。（ただ）「光や（まさる）」という「や」の字は、実際に見ないで思いやった感じを与えるだろうかと思う。

右の歌は、あの貫之の「夢のうちにも花ぞ散りける」と詠んだ歌を思い浮かべての作であろう。「夢には風を（うらみざらまし）」など詠んだ歌の姿は、優美なように思います。持とする。

【注】○日にみがかく花 日に照り映える花を、玉に例えて形容したもの。もと『本朝文粹』卷十所収の菅原文時作の詩序の一節で、『和漢朗詠集』（花、一一六）に収められた部分による表現。そこでは次のように花を形容している。「登み日登ニク風、高低千顆万顆玉」。○たぐひて「たぐふ」

は、連れ立つ意。○貫之が夢のうちにも花ぞちりけるといへるうた紀貫之の歌、「やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける」（『古今集』一一七、「山寺にまうでたりけるによめる」）

【考察】左の歌は、「日にみがかく花」に合わせるように、社の「朱あかの玉垣」も常より光が加わるかと思えるかと詠む。「日にみがかく」花は、「注」で触れたように、菅原文時が日に照り映える花を玉に例えて形容した語句によつており、そのため「玉垣」の「玉」と縁をもち、玉垣の「光」がまさると言う言葉が生かされている。

右の歌は、俊成の判詞の指摘によれば、

やどりして春の山べにねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける（『古今集』一一七、紀貫之）

の一首を背景とする。夢の内に花が現実と同じように散ると見ても、夢では花を散らす風をうらむことあるまいと詠んだのであろう。

俊成の判詞は、左歌については、その心を「いとをかし」と評価する。花を玉に例えて玉垣に結びつけた着想を認めたものと思われる。

ただ「光やまさる」と、疑問の意を示す助詞「や」を用いた点は問題視している。

右歌については、「夢には風を」などと詠んだ姿を「優」と評価し、持としている。

十二番

左持

積阿

83 身にしめし其神山の桜花雪降りぬれどかはらざりけり

右

頼政

84 風ふかばかへりかくれよ桜花さかぬ間もさぞ枝にこもりし

左、判者の愚僧の歌なるべし。誠に雪ふりにける事ふることどもどもにこそ侍るめれ。昔の春但むかし、当社当社のの花のさかりに、久しくまうで侍りし事のわすれずのみ侍るを、述懐せるばかりなり。

右の歌は、かへりかくれよとおき、さかぬ間もさぞなどいへる心すがた、誠にをかしをかしく侍り。但、すこし俗にちかくや侍らん。こ

れはかの競馬にことさら興をのりて、勝負を執せざる体にこそ侍るめれ。左の歌、老駑馬ながらとほるべきにや侍らん。

【通釈】（伝叙蓮筆本によって記す）

十二番 左勝

釈阿

83 身にしみて感じた、むかし神山で桜の花の雪のように降った様子は、古いことになったが、今も変わらず心に浮かぶのだ。

右

頼政

84 風が吹けば、元の枝にもどって隠れたらよい、桜の花よ、——咲かないうちは、そうして枝に隠れていたのだ。

左の歌は、判者である愚僧の歌にちがいない。まことに、花が雪と降ると見た古いことを詠んだ歌のようです。ただ、昔の春、当社の花盛りの時に、長らく参りましたことが、全く忘れ難く心に残っていますのを、歌に述べただけのものです。

右の歌は、桜に「かへり隠れよ」と言い、「咲かぬ間もさぞ」と詠んだ心や姿が、まことに面白くは思われず。ただ、少し俗に近いところがあるでしょうか。これは、あの競馬の催しに、わざと興味を引く乗り方をして、勝負にこだわらないのと同様の詠み方というものでしょう。左の歌は、（競馬で言えば）のろい老馬のようなものだが、そのまま先に立って、勝となるべきであろうかと思えます。

【注】○身にしみし 身に深くしみ通らせた。この場合の「しめ」は、下二段活用他動詞「しむ」の連用形。○其神山 そのかみやま。「そのかみ」（その昔、往時の意）に「神山」（上賀茂神社の背後の山）を掛けた表現。○桜花雪降りぬれど 桜の花の散るのを雪の降る様子に例えて言うが、また「降り」に「古り」（古くなる意の動詞「古る」の連用形）を掛けて、古いことになったが、の意も表わす。○愚僧 愚かな僧の意で、僧が自分をへりくだって言う語。判者である藤原俊成は当時出家して釈阿の法名を名乗る。○老駑馬 老いた、のろい馬。俊成が自作の歌をへりくだって例えた。俊成は当時六十五歳。

【別雷社歌合】注釈（二）

【考察】左の歌は、かつて身にしみて感じた、神山の花の雪と散る様子が、今も変わらず思い浮かべられる、との心であろう。掛詞を用い、往時の意の「そのかみ」に「神山」を掛け、また花の雪が「降り」に「古りぬれど」を掛けて詠んでおり、それが表現上微妙なひだを作り、一首の特色になっていると思う。こういう俊成の詠み様は、『俊忠集』に見える次の歌の影響があるかと思われる。

ゆきてみしそのかみ山の桜花ふりにし春ぞこひしかりける（三四）

右の歌は、桜の花に、風が吹いたら咲く前のように元の枝にもどって隠れよと呼び掛けている。これは無邪気と言うか、童心めいた思い付きを素直に詠んでいて、王朝風の優雅さを顧みないような詠み様の、異色の一首である。

俊成の判詞は、左歌については、自作であるだけに、昔神山で見た花のことが今も忘れ難いことを詠んだに過ぎない、とのみ言っている。対する右歌については、心姿が「をかしく」はあるが「少し俗に近く」思われるかと評している。そしてこの歌合の奉納される賀茂別雷神社の行事として有名な競馬に例え、その競馬でわざと人の興味を引く乗り方をして勝負を度外視したのに類する詠み様と言い、そのため「老駑馬」のような左歌を勝とすると記している。

十三番 左勝

静賢

85 神山に花のしらゆふかけてけりこやさほ姫の手向なるらん

右

季経

86 今よりはたかねへゆかんつくば山このもかもの花もみえけり

左の歌、花のしらゆふかけてけりといへるすがた、よろしくこそ侍るめれ。

右歌

右、たかねへゆかんといへる、このもかもの花みむころ、をかしくはみえ侍り。但、猶神山の花きよげに侍り。左を勝とすべし。

【通釈】

十三番

左勝

静賢

85 神山に、花の白木綿を掛けたと見える、——これは佐保姫が神に供えたものであろうか。

右

季経

86 今からは、高嶺を目指して行こう、——筑波山は、あちらこちらに咲く花も見えるのだ。

左の歌は、「花の白木綿かけてけり」と詠んだ様子が、結構なように思います。

右の歌は、「高嶺へゆかん」と詠んでおり、これは筑波山の「このもかのも」の花を見ると心が、「面白いとは見られません。ただ、やはり左歌に詠まれた神山の花がきれいな感じに見受けられます。(それで) 左を勝とする。

【注】○神山 十番の「注」参照。○花のしらゆふ 花を白木綿に見立てて言う。「白木綿」は楮の樹皮をさらして白いひも状にしたもので、幣帛として榊の枝に掛けるなどして用いた。○さほ姫 佐保姫。春の女神。○手向 手向け。神への供え物。○つくば山 筑波山。常陸の国の歌枕。今の茨城県の中央部にある山。○このもかのも 此の面々の面。こちら側、あちら側。あちらこちら。この語を用いた歌では「つくばねのこのもかのも」にかけはあれど君がみかけにますかげはなし」【古今集】東歌、一〇九五)が名高い。

【考察】左の歌は、神山の花を白木綿に見立て、これは佐保姫が神に手向けたものであろうか、と詠んでいる。これより前の『広田社歌合』には、

神がきにしらゆふかけてふる雪や天つみ空のたむけなるらん (社頭雪二十四番左、藤原邦輔)

という、神苑の雪を白木綿に見立て、大空が神に手向けたものだろうかと詠んだ歌が見え、それと着想の基本が似たところがある。ただこの静賢の左歌は、「花の白木綿」であるだけに、それを神に手向ける主体は、春の女神の佐保姫とされる。そういう春を主体とする点では、

同じ「別雷社歌合」の霞を詠んだ歌、

神山の梢にかかる夕霞これこそ春の手向なりけれ (霞十番左、平経盛)

などと共通するところがある。

右の歌は、筑波山の高嶺を直指して行こう、「このもかのも」の花も見える、と詠んでいる。この歌は、東歌として有名な、

つくばねのこのもかのもにかけはあれど君がみかけにますかげはなし (古今集) 一〇九五、常陸歌)

の言葉の花の歌に生かして詠んだ点を見所とするものであろう。俊成の判詞は、左歌については、神山に「花の白ゆふかけてけり」と詠んだ心、姿を、「よろしく」思われると評価している。

右歌についても、筑波山の「このもかのも」の花を見ると詠んだ心を、「をかしく」見えると二応評価している。しかし左歌で「神山の花」を詠んだのが「きよげに」見える点に、より高い価値を認め、左を勝とする。

十四番

左持

範玄

87 見わたせば花の波こす心ちしていづれの峰も末の松山

右

経家

88 おとにきくならの都の花みれば散積りても八重ぞかさなる
左右とも優にはみえ侍り。左は末の松山、ただ波にはあらで花の波こす所にあらん様にきこゆらむ。

右は、花みればといへるわたりや、すこしおもはまほしくみゆらん。持とすべきにや。

【通釈】(伝寂蓮筆本によって記す。)

十四番

左持

範玄

87 見渡すと、花の波が(峰を)越すと思われて、どの峰も皆、(波の越す)末の松山の姿であった。

右

経家

88 その名も高い、奈良の都の（八重）桜の花を見ると、散り積もつても八重に重なっていた。

左右の歌は、ともに優美には見えません。（ただし）左の歌は、末の松山が、普通の波ではなくて花の波が越す所であるように受けとられるだろうか。

右の歌は、「花みれば」と言っているあたりが、少し工夫を要するところと見えるだろうか。持とすべきかと思う。

【注】○末の松山 陸奥の歌枕。今の宮城県多賀城市八幡の末松山宝国寺の裏山の辺りと言われているが、確かでない。ここを詠んだ歌では、「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん」（『古今集』東歌、一〇九三）が、源流的な位置を占め、名高い。

【考察】左の歌は、花を波に見立て、その花の波が越すと見える峰々はすべて「末の松山」の姿であったと詠んでいる。これは「末の松山」を波が越えることと結びつけて詠んだ、次の東歌に始まる伝統を受けたものと思われる。

君をおきてあだしころをわがもたば末の松山波もこえなん（『古今集』、一〇九三）

もつとも、この東歌は、末の松山を波が越えると詠んでいるのではなくて、それがあり得ないことを前提として愛情の変わらないことを誓ったものである。しかし、この東歌を背景に置いた叙景的な歌として、早く次のような作が見られる。

浦ちかくふりくる雪は白波の末の松山こすかとぞ見る（『寛平御時后宮歌合』一四〇。『古今集』三二六、藤原興風）

この興風の歌では、雪を白波に見立て、その白波は末の松山を越えそうだと詠んでいる。この歌あたりを古い例として、以後末の松山を波が越す場合をいろいろ趣向して詠み入れた歌が見られるようである。当面の範玄の左歌も、そういう歌の系列に属し、花の波が峰を越すと見える場合を詠んだものであろう。

右の歌は、「音に聞く奈良の都の花」を見ると、散り積もつても「八

重」に重なっていたと詠む。伊勢大輔の

いにしへの奈良の都の八重ざくらけふ九重ここのへにほひぬるかな（『詞花集』二九）

の歌でも有名な「奈良の都の八重桜」の「八重」の語を眼目に趣向した作である。けれども、伊勢大輔の歌の「八重」から「九重」へイメージを転換した鮮やかさには及ばないと思われる。

俊成の判詞は、左右とも優美には見えると評した上で、左歌については、この詠み様だと「末の松山」が「花の波こす」所として古歌に詠まれているように受けとられると、問題点を指摘している。

また右歌については、「花見れば」と詠んでいるのを、もう少し工夫を要すると批判している。「見れば」といった説明の語句は、この場合必要と思われる点を指摘したものであろう。

十五番 左勝

89 春かぜも心してふけしめの内は匂ひことなる花とこそみれ

頼輔 道因

ゆきと散るたかねのはなををりえてはおもはぬそらのものとこそみれ（伝寂蓮筆本）

左歌、しめのうちの桜、春風もまことにこころすらんとおぼえて、

よろしくこそ侍るめれ。
（以下ノ部分ノ伝寂蓮筆本ノ本文ハ、次ニ挙ゲル）
右歌、雪「」

○伝寂蓮筆本に挙げる右歌と、それに対する判詞は、次のとおりである。

90 ゆきと散るたかねのはなををりえてはおもはぬそらのもの

右歌、ゆきとちるとおけるより、おもはぬそらのなどいへるすがた、もじづかひ、をかしくは侍るを、をりえてはといへるほどや、すこし俗にちかく侍らむ。猶左のしめの中の匂ひことならむはなは、まさるべくや侍らむ。

【通釈】（伝寂蓮筆本によって記す。）

89 春風も、気をつけて吹け、——神域に咲くのは、格別美しい花と見
るのです。

右

道因

90 雪のように散る、高嶺の花を折ることができて、これは思いもよらぬ
空のものを見るのです。

左の歌の、神域の桜は、春風もまことに気をつかうことであろう
と思われて、結構な作のように思います。

右の歌は、「雪と散る」と歌いだしたところから、「思はぬ空の」
ものなどと花を詠んだ姿、言葉遣いが、面白いとは思いますが、
「折り得ては」と言った辺りが、少し世俗的な感じがするでしょう
か。やはり左の歌の、神域の花の美しさが格別であるとする方が、
勝ることになるかと思えます。

【注】○しめの内 三番の「注」参照。○三舟の山 みふねの山。大和
の国の歌枕。今の奈良県吉野郡吉野町、宮滝の南にある山。

【考察】この十五番の本文は、伝寂蓮筆本と他の諸本とで大きな相違が
ある。まず右歌として挙げられる歌が全く違う。右歌に対する判詞も、
伝寂蓮筆本では、歌にふさわしい判詞が見られるのに対し、他の諸本
では、前掲のようにそれを欠くか、群書類従本のように「右歌、雪を
よめらむやうに聞ゆ」と歌に合うとは思われない短い言葉が置かれて
いる。これは『平安朝歌合大成』で萩谷朴氏が推測されるように、伝
寂蓮筆本に挙げる右歌が本来あったのを書き落とし、誤って他の歌を
入れ、そのために判詞が歌に合わなくなったので、判詞も削るなど手
が加えられた形が、諸本に見られる形であろうかと思われる。

それで、ここでも伝寂蓮筆本の形によって考えてゆく。
左の歌は、神域は俗界と異なり格別美しい花が咲くと見て、春風に
対して「心して吹け」と呼び掛けている。

右の歌は、「雪と散る高嶺の花」を折ることができて、これは思いが
けない「空のもの」と見る、といった歌意のように思われる。散る花

を「空に知られぬ雪を降りける」と詠んだ貫之の歌（『亭子院歌合』一
三、『拾遺集』六四）に多少似た言葉も見えるが、やはりこれは「雲と
散る高嶺の花」に即して、その花を高い空の世界に属するものとして
珍重する心の作であろうと思う。

俊成の判詞は、左歌については、神域の花の格別の美しさを詠んで
いる点を、「よろしく」と評価している。

右歌については、姿、言葉遣いを「をかしく」と評価するが、「折り
得ては」と言った辺りは「すこし俗に近く」思われようかと批判して
いる。「折り得ては」という現実の行為を「はさむ」ことで、「雪と散る高
嶺の花」の美しい世界が破られるおそれがある点を指摘したものかと
思う。

91 春毎にうす花桜いかなれば心にふかくそむるなるらん

右

親宗

92 山桜なぬかといふに散りはてて名残とどむる嶺のしら雲

左、うす花桜いかなればといひて、心にふかくとうたがへる心、
をかしくそむるを、
をかしくみえ侍るめれ。

右、名残とどむるなどいへる心すがた、いと宜しく侍るを、七日
といふにといへるや、ことなるよせなきやうに侍らん。うす花桜
すこしの事はまされるなるべし。

【通釈】（伝寂蓮筆本によって記す。）

91 春ごとに、薄紅に咲く桜に、どうして深く心で染める（思いを寄せ
る）のであろうか。

右

親宗

92 山桜が（咲いて）、七日というのに散ってしまうと、その名残をとど
めて、峰に白雲がたなびいている。

左の歌は、「薄花桜いかなれば」と言ったのを受けて、「心に深く

(そむるなるらん)と疑問視した着想が、まことに面白いものと見られます。

右の歌は、「名残とどむる」などと詠んだ心や姿は、大層結構なのですけれども、「七日といふに」と(七日と限定して)言っているが、これは特別な子細はないのであろうと思えます。左の薄花桜の歌の方が、多少勝っていると言えましょう。

【注】〇うす花桜 薄紅色の桜。〇心にふかくそむる 心で深く染める。心を深く寄せる。〇山桜なぬかといふに散り ここで「七日」と言っただのは、あるいは『万葉集』の「我が行きは七日は過ぎし童田彦ゆめこの花を風にな散らし」(二七五八)と関係があるのかもしれない。

【考察】左の歌は、春ごとに「うす花桜」にどうして「心に深く染むる」のであろうか、と詠む。桜の花の紅の色が「うす」いのに、心で「深く染むる」、深く心を寄せるということを対置して、趣向としたものであろう。

なお、この歌は、用語から見て、『詞花集』の次のような歌からヒントを得て詠まれた可能性があると思う。

京極前太政大臣家に歌合し侍りけるによめる 康資王母

くれなるのうす花ざくらにははずはみな白雲とみてやすぎまし(一八)

この歌を、判者大納言経信、くれなるのさくらには詩にはつくれども歌によみたることなむなきと申しければ、あしたにかの康資の王の母のもとへ言ひつかはしける 京極前太政大臣

白雲はたちへだつれどくれなるのうす花ざくら心にぞそむ(一九)

『高陽院七番歌合』(寛治八年)に康資王母の詠んだ桜の歌(二番左)と、それに関して藤原師実が作者に送った歌である。師実の歌の「うす花ざくら心にぞそむ」は、「そむ」が自動詞であるのに対して、当面の隆房の歌の「そむる」は他動詞と見られるが、一応二首は用語上の関連が考えられそうである。

右の歌は、山桜が七日のうちに散りはてて、「嶺の白雲」がその名残

をとどめている、と詠む。遠く咲き続く山桜を「嶺の白雲」に見まがうものとする歌は、古くから見え、

桜花さきにけらしもあしひきの山のかひより見ゆる白雲(古今集) 五九、紀貫之)

山桜さきぬる時は常よりも峰の白雲立ちまさりけり(亭子院歌合) 四、『後撰集』一一八)

などを初め、その種の作が少なくない。右歌もその流れを受けるものであろう。ただし右歌では、白雲は咲いた花自体を示すのではなく、散った花の名残としてとらえられている。これは作者の生きた時代の違いを反映するところがあるのかもしれない。

俊成の判詞は、左歌については、心が「をかしく」見えると言う。着想の面での趣向を評価したものであろう。

右歌については、花の「名残とどむる」などと詠んだ心、姿を「いと宜しく」と評価するが、花の散るまでの日数を「七日といふに」としたのは「ことなるよせなきやう」だと批判して、対する左歌を相対的に勝ると判定する。

十七番 左持 有房

93 散る花のかたみとすべき春さへに残りすくなく成りも行くかな 経正

94 ちるぞうきおもへば風もつらからず花をわきてもふかばこそあらめ 左右ともにいうに侍るべし。形見とすべき春さへなどいへる心すこしあはれにこそきこえ侍れ。

花をわきてもなどいへる姿、文字づかひ、いとをかしきこえて、思ひわかれず侍れ。持とすべきにや。

【通釈】(伝殺蓮筆本によって記す。)

十七番 左持 有房

93 散る花の、思い出のよすがとすべき春まで、(花と同じように)残り少なくなつてゆくことだ。

94 花の散るのはつらいこと、だが思うに、風も無情とは言えぬ、
花を指して吹くのならともかくだけれど。

左右ともに優美な作でしょう。(そして左歌の)「形見とすべき春
さへに(残り少なく)」などと詠んだ心は、寂しく、心をうたれる
ものに思われます。

(二方、右歌の)「花をわきても(吹かばこそあらめ)」などと詠ん
だ歌の姿も、言葉遣いが大層面白く思われて、優劣の判断がつけ
られませんので、持とすべきかと思えます。

【注】○かたみ 思い出す種となるもの。○わきても 分けても。特に
(他と) 区別して。○ふかばこそあらめ (特に花を指して) 吹くの
なら別だけれど。○すこしあはれに 「すこし」は、その形の本が多い
が、伝寂蓮筆本に「すこく」とあるのによつて、心にしみる寂しさを
示すものと見たい。

【考察】左右の歌は、ともに散る花を詠んでいるが、左の歌は、花が散つ
て残り少なくなる上に、その花の思い出のよすがとなるべき春の日数
まで残り少なくなつてゆく、と嘆いたものであろう。

右の歌は、花が散るのはつらいが、花を散らす風を無情と恨むのは
当たらぬ、風が花を指して吹くのなら別だが、——そんな趣旨の歌
であろう。少し理に落ちた作かと思う。ただ、花を風が散らすことに
ついては、

花散らす風のやどりはたれかする我をしへよ行きてうらみむ(『古
今集』七六、素性法師)

などの、花を散らす風を恨む歌の伝統があるのに対して、これは異見
を示すことを趣向にしたのであろう。

俊成の判詞は、左右ともに「優」とした上で、左歌については、伝
寂蓮筆本によれば、心が「すこくあはれに」思われると評し、右歌に
ついては、姿、言葉遣いが「いとをかしく」思われると評して、持と
している。

【備考】十七番右歌は『玉葉集』(二六〇)に収められている。

十八番 左

95 木のもとをやがて住家となさじとて思ひがほにや花はちるらん

右勝

寂蓮

96 かげふけば峰にわかるる山桜色のみならず雲かとぞみる

左歌、やがて住家となさじとてといへる(心)〔伝寂蓮筆本、以下同じ〕

右の歌、峰にわかるるなどいへることはつづき、よろしく侍るに
や。右はすこしはまさり侍らん。神慮おそるるによりて、いささ
かの事もおもふところをわかち侍るなり。

【通釈】

十八番 左

忠度

95 木の下を、花を見る人が、そのまま住みかにならないようにと、花は
そう思う様子で散っているのだろうか。

右勝

寂蓮

96 風が吹くと、峰で分かれて散る山桜の花は、色ばかりでなく、その
姿も、雲かと見えた。

左の歌は、「やがて住みかとなさじとて」と詠んだのが、まことに
艶に思われます。

右の歌は、「峰にわかるる(山桜)」などと詠んだ言葉の続け様が、
結構かと思えます。この右歌の方が、多少はまさっているでしょ
う。これは神のみ心を恐れ多く思うところから、わずかなことで
も私見を判断として記す次第です。

【注】○思ひがほ 思っている様子。○かげふけば峰にわかるる山桜
「風吹けば峰にわかるる」という句は、「考察」に挙げる壬生忠岑の歌
の第一句第二句と同じだが、第三句は忠岑の歌に「白雲の」とあると
ころを、「山桜」と変えている。そのため「白雲」のイメージが「山桜」
に微妙に重なり、この「山桜」は、峰で風に吹き分けられ、白雲のよ
うに見える、散る花の遠望を表現することになるであろう。○えむ

艶。俊成はこの「艶」の語を『住吉社歌合』（一一七〇）以後、判詞にかなり多く用いており、『民部卿家歌合』（一一九五）の跋では、歌は「ただよみもあげ、うちもながめたるに、艶にもをかしくも聞ゆる姿のあるなるべし」と記し、「艶」を歌の根本的な特長の一つとしている。なお俊成はこれと同様の趣旨を他の文章にも記すが、『慈鎮和尚自歌合』では「艶にも幽玄にもきこゆる」、『古来風体抄』では「艶にもあはれにもきこゆる」とする。その「艶」の意味するところは簡単に定義し難いが、優美を基調として、独特の魅力的な風情の感じられる状態とも言えようか。岡崎義恵氏『美の伝統』に詳細な検討が見られる。

【考察】左の歌は、人が「木の下」を「住家」とすることに關する花の思いをとり上げた作であろう。その言葉は、次のような花山院の歌に源をもつことを思わせる。

木のもとをすみかとするればおのづから花見る人になりぬべきかな
〔金葉集〕三奏本四九、〔詞花集〕一七六、〔和漢朗詠集〕五八六
では第五句「なりにけるかな」

これは有名な一首で、その言葉を新しく生かした歌が作られ、『別雷社歌合』に近いころには、次のような歌が詠まれている。

散り散らずおぼつかなきに花ざかり木の下をこそすみかにはせめ
〔重家朝臣家歌合〕四、三河

この三河の歌の趣旨は、花山院の歌の場合と違って、花に引かれる心から「木の下」を「すみか」にしようというのであろう。こういう歌を念頭に置いて左歌が詠まれたと見ると、花に引かれてくる人が木の下をそのまま住みかにならないようにと、そう花は思つて散っているのだらうかとの作意かと思われる。

右の歌は、その言葉から見て、次のような壬生忠岑の歌を本歌とした作であろう。

風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か〔古今集〕
六〇一、〔古今和歌六帖〕五一五

「注」でも触れたが、右歌はこの忠岑の歌の第二句までをそのまま用い、

第三句の「白雲の」を「山桜」に変え、それによって白雲にまがう山桜の花の遠望を詠んだ作としたものと思われる。

俊成の判詞は、左歌については、「やがて住家となさじとて」と詠んだ点を「艶」と評価する。伝寂蓮本では、特にそう詠んだ心を「艶」と評したことになる。俊成が「艶」と評する場合、一般には言葉や姿について言うことが多く、心について言うことは少ないが、その例がないわけではない。ここでは花を見る人が「木のもと」を「住みか」とする歌の先例を受けて、花のそうさせまいとする気持ちを取り上げた着想を「艶」と評したと見てよいであろうか。

右歌については、「峰にわかるる」などと詠んだ言葉続きを「よろしく」見ると評価する。忠岑の歌の「峰にわかるる白雲の」を転じて「峰にわかるる山桜」とした言葉の続け様を巧みと評価したものかと思う。そして右の歌が少しは勝るだろうと言っている。

十九番

左持

97 吉野山峰の嵐のふくまみにむらぎえわたる花の白雪

右

盛方
顕昭

98 桜咲くをりにしなれば初せ山ただ一さかりこゆる白なみ

左歌よしの山、右の長谷山、歌のすがたはともにをかしく侍り。

村ぎえわたる白雪と、ただ一さかりこゆる波などみるばかりにて、ことにはなをおもへる心はなきやうにや侍ららん。よりて持とす。

【通釈】

十九番

左持

盛方

97 吉野山の、峰に激しい風が吹いたので、花が、白雪のまだらに消え残るように見渡される。

右

顕昭

98 桜の咲くころともなると、初瀬山を、一年にただ一度の盛りの花が、白波の越えるように見える。

左の吉野山の歌、右の初瀬山の歌は、歌の姿はともに面白いと思

います。しかし花を（左歌は）「むら消えわたる白雪」と見、（右歌は）「ただ一さかり越ゆる波」と見るなどというだけのことです。特に花を愛している心は見えないかと思えます。そのため持とする。

【注】○吉野山 六番の「注」参照。○むらぎえわたる 一面に、雪がまだらに残っている。○初せ山 初瀬山。大和の国の歌枕。今の奈良県桜井市初瀬にある山。平安時代以後は特に桜の名所として歌に詠まれた。○一さかり 一時盛んなこと。

【考察】左の歌は、吉野山で、山風を受けて散りかかった花の様子を、白雪がまだらに残るのになぞらえて詠んでいる。

右の歌は、初瀬山で、年に一度の盛りの時を迎えた花の様子を、白波が山を越える姿に見立ててとらえている。

俊成の判詞は、左右ともに歌の姿は「をかしく」詠まれていると評した上で、左歌は花を「むら消えわたる白雪」と見、右歌は花を「越ゆる白波」に見立てた作だが、ともに「花を思へる心はなきやう」だと評している。花を題とする歌で、花を賞する心が乏しいのは、基本的な欠点であるとする立場からの批判である。

二十番

左持

（伝寂蓮筆本、以下同じ）

99 たづねつる花咲きにけりみよしののたかきの山にかかる白雪

隆 信

右

仲 綱

100 こぼれ出でて匂ふものから白雲に空がくれする山ざくらかな

左歌、みよしののたかきの山などめづらしき事にはあらねど、宜しきやうに見え侍り。

右歌、空がくれするなどいへるすがた、をかしくみゆ。左右とりどりなり。よりて持とすべし。

【通釈】

二十番 左持

隆 信

99 尋ねてきた花が咲いていた、——吉野の高城の山に、（花の）白雲が

かかっている。

右

仲 綱

100 霞からこぼれ出て、美しく咲いているが、山桜の花は、空の白雲に身を隠したふうに見える。

左の歌は、「み吉野の高城の山」など、目新しいことではないが、わるくない詠み様に見えます。

右の歌は、「空隠れする」などと詠んだ様子が、面白く見える。それで左右の歌はそれぞれ違った特徴をもつ。そのため持としようと思う。

【注】○たかきの山 高城山。大和の国の歌枕。今の奈良県南部の吉野山地の山。金峰神社の北側にある。○こぼれ出でて匂ふ「あさみどり野べの霞はつつめどもこぼれてにほふ山ざくらかな」（拾遺抄）二五ほか）の歌によれば、霞からこぼれ出て美しく咲く意と見られる。○空がくれする 隠れたふりをする。ただし「空」は「白雲」との関係から天空の意も掛けて言う。

【考察】花十九番までは、伝寂蓮筆本の本文が優れていると思われる場合が少なくないが、この二十番は、その点に疑問がある。ここで伝寂蓮筆本が流布本と異なる部分は、傍記したとおり三箇所あって、その内第二、第三の部分はどちらの本文がよいとも言い切れなけれども、最初の部分の隆信の歌の初句は、流布本の「たづねつる」の形なら問題は、伝寂蓮筆本の「たづねつ」の形だと後の語句に結びつき難いと思われる。そして『私家集大成』所収の書陵部蔵「隆信朝臣集」（七）にも、「たづねつる花さきにけり」という第一句第二句をもつ歌形が見られるが、「たづねつつ花さきにけり」という形の歌は他の諸本を通じて、見いだし難いようである。それでこの二十番については、伝寂蓮筆本の本文によらず、流布本の本文によって見てゆくことにする。

その場合、左の歌は、尋ねてきた花が、「み吉野の高城の山にかかる白雲」と見えて咲いていたと詠んだと思われる。遠山の花を白雲と

らえるのは、伝統的な着想の型だが、ここでは特に次のような『万葉集』の歌に見られる、高城の山の白雲に結びつけて詠もうとしたのであろう。

み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびけり見ゆ (三五六、釈通観)

右の歌は、初句に「こぼれ出でて」とあるのが、唐突とも見えるが、「注」で触れたように次の歌を本歌として詠んだものであろう。

あさみどり野への霞はつづめどもこぼれてにほふ山ざくらかな (拾遺抄) 二五)

この歌は、末句「山ざくらかな」が当面の右歌の場合と同じである『拾遺抄』の歌形を挙げたが、もとは末句「花ざくらかな」の形で、『寛平御時后宮歌合』(一一)に見え、『新撰万葉集』(五)、『古今和歌六帖』(三五四)、『拾遺集』(四〇)等にも収められる一首である。この一首によつて、右歌は「こぼれ出でてにほふ」の言葉で、霞からこぼれ出て美しく咲く花の様子を伝えようとしたのであろう。

そして右歌は、その山桜の花が「白雲に空隠れする」と詠んでいる。花が空の白雲にまがうのを、山桜の花が意志を持って身を隠したように表現して、趣向としたのであろう。

俊成の判詞は、左歌については、「み吉野の高城の山」など珍しくはないと一方、「宜しきやう」に見えると評している。どういふ点で「宜しきやう」に見えるのか、具体的に記していないが、一首がおおらかな格調で詠まれている点などを認めたのであろうか。

右歌については、花が「空隠れする」などと詠んだ歌の姿を「をかしく」見えると評している。これは前記のような表現上の趣向を認めたのであろう。そして「左右とりどりなり」と言つて、持としている。

二十一番 左勝

右

十年をへておなじ桜の花の色をそめます物は心なりけり

公時

定家

『別雷社歌合』注釈(二)

¹⁰² 桜花また立ちならぶ物ぞなき誰まがへけん峰のしら雲

左、おなじ桜の花の色を染めます物はいへる心すがた、いとをかしくも待るかな。

右、たれまがへけんみねの白雲といへる心も、よろしきにやとみえ侍れど、左歌なほめづらしくもみえ侍れば、左勝つべきにや侍らん。

【通釈】

二十一番 左勝

公時

¹⁰² 十年を経ても同じ桜の花の色を、ひとしお美しく染めるものは、(花を深く思う) 心であつたのだ。

右

定家

桜の花は、比類のない美しさだ、—— 一体だが、峰の白雲と見まがえたものであろう。

左の歌は、「同じ桜の花の色を染めますものは」と詠んだ心や姿が、大層面白く思われます。

右の歌で、「たれまがへけん峰の白雲」と詠んだ心も、わるくないように見えますが、左の歌がやはり目新しいと見えることもありますので、左の歌が勝となるべきであらうかと思ひます。

【注】○そめます 一層美しく染める。なお「染めますものは心」と続くが、「染む」は、心に関しては、深く思い入れる意味で用いられる。

○立ちならぶ 肩を並べる。「立ち」は接頭語。

【考察】左の歌は、年々同じ桜の花の色を「染めます」ものは人の心である由を詠む。「染めます」は、一層美しく染める意味だが、「染む」は心に関しては深く思い入れる意味に用いられるので、花を深く思う人の心が花の色に美しさを加えるという気持ちを感じさせる表現になっている。

この左歌に比べると、右歌は、表現が直線的と言うか、端的に詠まれているようだ。桜の花は比類のない美しさで、これを一体だが峰の白雲と見まがえたのであろうと詠む。山桜の花を峰の白雲にまがう

ものと見る着想の歌は、紀貫之の、

山桜咲きぬる時は常よりも峰の白雲たちまさりけり（『亭子院歌合』
四、『後撰集』一一八）

などを初め、多く詠まれている。そのため類型化された着想を明瞭に否定した点が、一首の特色と言えは特色であろう。定家の十七歳の時の作で、歌として優れたものとは言い難いと思うが、常識を否定して端的に詠んだ点に、個性的な態度がうかがわれる。

俊成の判詞は、左歌については、その心姿を、「いとをかしくも侍るかな」と評価する。

右歌については、「たれまがへけん峰の白雲」と詠んだ心を「よろしきにや」と評価する。これは前記のように類型的な着想を明瞭に否定してみせた点を認めたものかと思う。ただその上で、やはり左歌が「めづらしく」見えると言ひ、左の勝としている。

【備考】二十一番左歌は『千載集』（六三）に収められている。

二十二番 左持

103 桜花やがてかへさぬ春風にことしもこりずさそはれんとや

右

伊 綱

104 一とせはちらで桜のほひつつ花さかぬ間の七日なりせば

左は、すがたふるまひわりなくみえて、いとをかしくこそ侍るめ
れ。

右は、花さかぬ間の七日なりせばといへる心、またうにみえ侍
り。仍持とすべし。

【通釈】

二十二番 左持

定 宗

103 桜の花を誘ってゆき、そのままかえさぬ春風に、花は今年もこりず、
誘われようとすののだろうか。

右

伊 綱

104 一年の間、散らずに桜が美しいままで、花の咲かない間が、七日だっ

たらよいのだが。

左の歌は、姿、歌い様が格別優れたものと思われて、大層面白い
作のようです。

右の歌は、「花咲かぬ間の七日なりせば」と詠んだ心が、これも優
美でよいと見られます。それで持しようと思う。

【注】○七日なりせば「七日」は、ここでは実際に花の咲いている間
として言っている。『万葉集』に「我が行きは七日は過ぎじ童田彦たごひゆめ
この花を風にな散らし」（二七五）とある。「七日なりせば」という言い
様は、内容は異なるが、橘元任もととうらの七夕の歌、「たなばたのあふ夜の数の
わびつつも来る月ごとのなぬかなりせば」（『後拾遺集』二四四）の影響
があるかもしれない。○すがたふるまひ 歌の「姿」は、心の言葉に
表現される状態。「ふるまひ」もそれに近いが、一層動的なとらえ方で、
心の動きに感じる言葉の運び様を言ったものであろう。○仍 よりて。

【考察】左の歌は、桜の花と春風とを擬人的にとり上げて、花を誘って
いってもどさぬ春風に、花は今年もこりず誘われようとするのか、と
詠む。花が風に散らされるのを惜しむ心を根底にもつが、人間関係に
見立てる趣向を前面に出した作である。

右の歌は、桜の花が一年中美しいままで、花の咲かない間が年間七
日だったらよいのにと願っている。ここで「七日」というのは、「注」
で触れたように『万葉集』（二七五）の歌によった可能性があるかと思
うが、実際に花の咲いている期間として意識した上で、逆に花の咲か
ない期間が七日だったらよいのにと願ったものであろう。

俊成の判詞は、左歌については、歌の詠み様が格別優れていて「い
とをかしく」見えると評している。花と風を擬人化した趣向を主とし
て評価したのであろう。

右歌については、「花咲かぬ間の七日なりせば」などと詠む、花に引
かれる心が、「優」に見えると評し、持と判定している。

二十三番 左勝

成 家

105 花ざかりかもの水がききてみれば吉のの山も名にこそ有りけれ

右 公衡

106 花ざかり四方の山べにあくがれて春は心の身にそはぬかな

左右の花ざかり、共に宜しくみえ待るにとりても、右はなほ、春はこころのなどいへるわたり、いとをかしくおぼえ待るを、あくがれながら花のもとにしもむかはぬにやとぞみえ待るうへに、左歌まことに社の花めでたることや、もし勝とも申すべからん。

【通釈】

二十三番 左勝 成家

105 花盛りに、賀茂の社の玉垣の辺りに来て見ると、花の吉野の山も、名ばかりのものと思われた。

右 公衡

106 花盛りになると、方々の山辺に心が浮かれ出て、春は心が身に付かなくなってしまう。

左右の花盛りの歌は、ともにわるくないと見えますが、それについて言うと、右の歌はやはり、「春は心の（身にそはぬかな）」などと詠んだあたりが、大層面白いと思われまますけれど、花に心を引かれていながら花の下には行こうとしないのだろうかという疑問が浮かびまして、その点から言うと、左の歌は実際に社の花を賞美したもので、そのことが、あるいは勝ると言うべきでしょう。

【注】○かもの水がき 賀茂の瑞垣。賀茂別雷神社（上賀茂神社）の玉垣。○吉の山 吉野山。花の名所。「吉野の山も名にこそありけれ」と詠んでいるところから見て、花見に「よし」という意を掛けたか。

○名にこそ有りけれ 名ばかりであった。有名無実だった。この語句をことういう意味に用いた先例は、「家鳥は名にこそありけれ海原を我が恋ひ来つる妹もあらなくに」（『万葉集』三七四〇）。○あくがれて 「あくがる」は、心が何かに引かれて身から離れることを言う。

【考察】左右の歌は、ともに「花ざかり」の語を冒頭に置いているが、

『別雷神歌合』注釈（二）

左の歌は、賀茂の社に来て見た花盛りの見事なことを、これに比べる

と花の吉野山も名ばかりのものと思われたというふう

に詠む。右の歌は、花盛りには方々の山辺の花に「あくがれ」て、春は心が身に添わなくなると詠む。こういう山の花に心が「あくがれ」ることを詠むのは、次のような躬恒の歌以来の伝統によるものである。

わが心春の山べにあくがれてながし日をけふもくらしつ（亭子院歌合）一四、凡河内躬恒。『新古今集』八一では作者を紀貫之としてゐる。

俊成の判詞は、左右の歌を「共に宜しく見え」とした上で、右歌については、「春は心の（身にそはぬかな）」などと詠んだのを「いとをかしく」思われると評価する一方、花に「あくがれ」ながら「花の下にしも向かはぬにや」と疑問視する。そして、左歌は実際に社の花を訪ねて賞美している点で、「もし勝とも申すべからん」と、ためらうような口調ながら、一応左の勝としている。

けれども、俊成は『千載集』には右歌を収め、左歌を収めていない。これは賀茂社の歌合という場を離れて二首を歌として比べると、右歌の方が、花に引かれる心や詠み様の上でやはり優れていると見たためであろうと思う。

【備考】二十三番右歌は『千載集』（六四）に収められている。

二十四番 左勝 季広

107 をしむにはとまらぬ花のしたがへばうらやましきは春の山かせ

右 備前

108 さくと待ち散るとて歎く春はただ花に心をつくるなりけり

左歌、うらやましきは春の山風といへるすがた、優にこそ待るめ

れ。右の歌、心すがたよろしくは待るを、かやうの心のうた、つねの事なるにやあらん。左勝と申すべくや。

【通釈】

107 散るのを（人が）惜しんでも、残ってくれない花が、（風に）従って行くので、うらやましいのは春の山風だ。

右

備 前

108 花が咲くというので待ち、咲けば散るというので嘆く、——そんなふうで、春は専ら花に心を傾けるのでした。

左の歌は、「うらやましきは春の山風」と詠んだ姿が、優美と言つてよいでしょう。

右の歌は、心も姿もわるくはないのですが、こういう着想の歌は、珍しくないだろうかと思う。左の勝と言ふべきでしょうか。

【注】○花に心をつくる 群書類従本は「花に心をつくす」。いずれも心を傾ける意味であるが、「心を付くる」より「心を尽くす」の方が強い意味になる。用例としては、「春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくるころかな」（『拾遺集』四七、齋宮内侍）、「年をへて待つをしむも山桜花に心をつくすなりけり」（『西行上人集』六一四）など、どちらの形も見られる。

【考察】左の歌は、花と春風を擬人的にとり上げている。人が別れを惜しんでも残ってくれない花が、風の誘いには従って行くので、うらやましいのは春の山風だ、と詠む。花と風との関係を人間関係に見立てる趣向をとる点は、二十二番左歌と同様である。ただ二十二番左歌は、花を誘ってかえさぬ春風に、花は今年もこりず誘われることかと、風を敵役に仕立てていたが、ここでは風を「うらやましき」ものと見ている。このような見方を素直で優しい態度として、俊成は判詞に「優」と評したのかと思う。

右の歌は、花を待ち、花が散るのを嘆く春は、専ら花に心を傾ける季節だ、と詠む。別に目新しい特徴は見られないようだが、素直に、のびやかに詠まれてはいる。

俊成の判詞は、左歌については、「うらやましきは春の山風」と詠んだ姿を、「優」と評している。前記のように風を敵役に仕立てない優し

い態度を評価したのであろう。

右歌については、心姿が「よろしく」と評する一方、着想がありふれたものである点を指摘し、左の勝としている。

二十五番 左勝

兼 綱

109 入りぬればそこともしらず中にのきてぞ花はみるべかりける

右

智 将

110 をしみつつをらで帰らばあぢきなく風にまかすと花や恨みん

左、のきてぞ花はなほいへる姿、をかしくこそみえ侍るめれ。上の句の心ちやすらん。但みやまのなかなとさも侍りなん。

右、をしみつつといへるを、風にまかすと花やうらみむと思ひながら帰りこん程や、ほいなく侍らん。素性法師は、くれなばなげの花のかげかとはこそよみて侍るめれ。のきてぞ花はといへる、なほすがたすこしはまされるにや。

【通釈】

二十五番 左勝

兼 綱

109（花の咲く）山も入りこんでしまつと、どこなのか定かでない、——いっそ離れて、花は見るべきものだった。

右

智 将

110 花を惜しんで、折らずに帰れば、花は心に面白くもなく、わたしを見捨てて風に任せたと、恨むことだろうか。

左の歌は、「のきてぞ花は（見るべかりける）」と詠んだ姿が、面白いものに見えるようです。上の句の「入りぬればそことも知らず」と詠んだ心は、深い山の中などでは、そう思われることでしょう。

右の歌は、花を「惜しみつつ」と詠んでいるが、「風にまかすと花やうらみん」と思いながら帰ってくるようでは、残念なことだろうかと思えます。素性法師は「暮れなばなげの花のかげかは」（日が暮れたら花陰は立派な宿になる）と詠んでいるようです。左の

歌で「のきてぞ花は（見るべかりける）」と詠んだのが、やはり歌の姿が多少はまさっているでしょうか。

【注】○入りぬれば 花の咲く山に入りこんでしまうと、の意であろう。○そこもしらす どころであるかも分らない。○のきて 離れて。

○あぢきなく（自分の気持ちに反して）面白くなく。○上の句の心ちやすらん。但…… 文意不明。群書類従本等に「上の句の心、みやまの中などさも侍りなむ。」とあるのに従って見ておく。○素性法師 俗名は良岑玄利。僧正遍昭（良岑宗貞）の在俗時代の子。三十六歌仙の一人。生没年未詳。○くれなびなげの花のかげかは 「いざけふは春の山べにまじりなむ暮れなびなげの花のかげかは」（『古今集』九五、素性）。『古今集』の詞書に「雲林院の親王のもとに、花見に、北山のほとりにまかれりける時によめる」とある。歌の大意は、さあ、今日は春の山辺に分け入りましょう、日が暮れたら、花陰はかりそめのものではない、立派な宿なのです。

【考察】左の歌は、花の咲く山に入りこむと場所も定かでない、むしろ離れて花は見るべきものと知ったという歌意であろう。着想に目新しさの認められる作かと思う。

右の歌は、花を惜しんで手折らずに帰れば、花の気持ちとしては面白くもなく、風に任せたと恨むであろうと詠む。花を擬人化し、花の心を思いやることを趣向とした作であろう。

俊成の判詞は、左の歌については、下の句の「のきてぞ花は（見るべかりける）」と詠んだ姿を「をかしく」見えると評している。

右の歌については、あとで「花や恨みん」と思いながらも帰るので「本意なく」思われるだろうと言う。これは引き合いに出した素性の歌に「暮れなびなげの花のかげかは」（日が暮れたら花陰がよい宿になる）と詠まれているような、花に打ちこむ心が望ましいと見る立場から指摘したものであろう。

二十六番 左

敦伸

III かぜだにも吹かでのどけき春ならばをるてにのみや花はちらまし
右勝 勝命

II かがりありて露と消えなん世なりとも花に心やのこし置くべき
左、をるてにのみやといへる姿、いとをかし。ただし、吹く風も枝をならさざらむ春の花を、をるてにのみちらさむ事いかが。右、つゆと消えなむ世なりとも花に心やのこしおかむといへる心、よろしきにやあらん。以て右為勝。

【通釈】

二十六番 左

敦伸

III 風さえも吹かず、静かで穏やかな春ならば、花は、折る人の手だけに散るであろうか。

右勝

勝命

II 命は限りがあり、露のように（はかなく）消える生涯であっても、花に心を残しておくことになろうか。

左の歌は、「折る手にのみや（花は散らまし）」と詠んだ姿が、大層面白い。ただし、吹く風も枝を鳴らさぬ太平の世の（しるしである）春の花を、折る人の手だけに散らす（と詠む）ようなことは、いかがであろうか。

右の歌は、露のようにはかなく消える生涯であっても、花に心を残しておくことになろうかと詠んだ作意が、結構であるように思う。右の歌を勝とする。

【注】○吹く風も枝をならさざらむ春の花 吹く風も静かで枝は音を立てない太平の世に咲く春の花。「吹く風枝を鳴らさず」は、世の中がよく治まって静かなことを表わす成句。『論衡』の「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴條、雨不破塊」、『西京雜記』の「太平之世、則風不鳴條」等による。

【考察】左の歌は、「注」で触れたような「吹く風枝を鳴らさず」の成句を背景にもつと思われる、次の歌などによるところがあらうか。

山ざくらあくまで色を見つるかな花ちるべくも風吹かぬ世に（『和

漢朗詠集』六八一、平兼盛。『兼盛集』四では第二句「あくまでけふは」

そして、そういう風も静かな太平の世では、花は折る人の手だけに散ることになるうかと想像を楽しんで、そのことを趣向とした作かと思

う。右の歌は、やがてはかなく消え去る人生でも、花に心を残すことになるだろうと、花に強く引かれる心を詠んでいる。

俊成の判詞は、左の歌については、「折る手にのみや花は散らまし」と詠んだ姿を「いとをかし」と評する一方、吹く風も枝を鳴らさぬ太平の世のしるしである花を、折る人の手で散らすことを詠むのは穩当でない指摘したと見られる。

それに対して右の歌は、はかなく世を去っても花に心を残すことになろうと、専ら花に引かれる心を詠んだ点を、「よろしきにやあらん」と評価し、勝としている。

二十七番 左勝

梢まで花のしらゆふかけてけり神もうれしと春をみるらし

右

祐盛

山桜雪の色こそうばふともふるならひをば伝へざらん

左歌、はなのしらゆふは、これもよろしくみゆ。らしなども、歌
文庫(幽斎本)
がら有るさまなるべし。

右歌、ふるならひをばといへる、をかしくはきこゆるを、誹諧の体にぞみゆる。左勝つべきにこそ。

【通釈】

二十七番 左勝

三 こそえまで、花の白木綿を掛けわたした、——神もうれしいと思つて、春げしきを御覧になると思われる。

右

祐盛

山桜は、雪の白い色は奪つても、(雪の)降る習わしは、受け継がな

いでほしいものだ。

左の歌で、花を白木綿に見立てたのは、この場合も結構と思われ
る。「見るらし」と言う「らし」などの言葉も、(ここでは)歌の
風格のある様子を示すものである。

右の歌で、(花を雪に結びつけて)「降るならひをば(伝へざらん)」と言つたのは、面白くは思われるが、誹諧の体(正調でない歌の姿)と見られる。左の歌が勝るとすべきであろう。

【注】○花のしらゆふ 十三番の「注」参照。○雪の色こそうばふとも 雪の白い色は奪つても。花の白さについて、雪の白い色を奪つたと詠む歌の先例には、「雪の色をうばひてさける梅の花今さかりなり見む人もがも」(『万葉集』八五四)以下の歌がある。○歌がら有るさま 歌の風格の感じられる様子。○誹諧の体 正調にとられない歌の姿。この名称の源流は、『古今集』卷十九の雑体(まじりて)の一つの「誹諧歌」にある。清輔の『奥義抄』では「漢書」を引いて「誹諧者滑稽也」とするが、『古今集』に「誹諧歌」として収められる歌は、『万葉集』の戯咲歌などより広い範囲にわたるようである。正雅の格調によらない、俗な表現をもつ歌と見る説がよいかと思う。

【考察】左の歌が、花を白木綿に見立てて、「花の白木綿かけてけり」と第二、第三句に歌う点は、十三番左歌と同じである。ただこれを受ける下の句では、十三番左歌は「こや佐保姫の手向けなるらん」と、花の白木綿を神に供えた主体を佐保姫であろうと想像し、それを趣向にすると見えるが、この二十七番左歌は「神もうれしと春を見るらし」と、花の白木綿を供えられた神もうれしく思われるはずだというふう

に、別に趣向を加えず、率直に詠んでいる。
右の歌は、雪を引き合いに出して花を詠む趣向で、花は雪の白さを奪つても、雪の降るのをまねて散るのは避けてほしい旨を詠む。

俊成の判詞は、左歌については、花を白木綿に見立てたのを、この歌の場合も「よろしく」見えるとする。そして下句に「神もうれしと春を見るらし」と「らし」を用いたのを肯定する趣旨を記している。

これは「らし」が早く古語と見られ、公任の『新撰髓腦』にも

かも、らしなどの古詞など別してつねによむまじ。

と記されることなどを念頭に置いて、ここでは「らし」が生かされて
いることを指摘したのである。「らし」は、『万葉集』などにも用例
の多い古語だが、同じ推量の助動詞でも「らむ」などと比べると、強
い確信をもって推量する気持が濃い。それで、この左歌のように神
のうれしく思う心を認めて端的に詠む場合は、「らし」を用いた方が、
古風でもそれなりの風格を生むと俊成は考えたのではなからうか。

右の歌については、花は雪の「ふるならひをば」受け継がないでほ
しいと詠んだのを、「をかしく」は思われるが、「誹諧の体」に見える
として、左の勝と判定している。「誹諧の体」は、「注」で触れたよう
に、正しい格調によらない歌の姿を言うのであろう。

二十八番 左勝

115 あかす見る花ばかりだにちらさずは句を風にをしみやはする

右

安性

116 たづねつる花みる程もいかにこは春の心はのどけくもなき

左歌、すがたをかしといひつべし。にほひをとでもしまざらん

事やいかが。

右、詞づかひをかしてからむとは思へり。春のころはのどけくも
なきといへり。末の句には「とくはる末の句は心はのどけからましといへる本歌に」はるのころはのどけからま

しと本歌に、ことのほかにきこえ侍るめり。業平朝臣もうれたく
やおもはむとおほえ侍りし。以_レ左可_レ為_レ勝。

【通釈】

二十八番 左勝

親盛

115 飽きず見る花さえ散らさないなら、花の香りを風が運んでいっても、
惜しみはしないのだが。

右

安性

116 尋ねてきた花を見ている間も、どうしてこのように、春の心は落ち

着かないのであろうか。

左の歌は、詠み様が面白いと言えそう。ただ、「にほひを風に惜
しみやはする」と言うが、花の香りでも、惜しまないということ
は、いかがであらうか。

右の歌は、言葉の用い様が面白い作だろうとは思われる。(しかし)
「春の心はのどけくもなき」と詠んだ下の句は、「春の心はのどけ
からまし」と詠んだ本歌に対して、実に心外なように思えます。
業平朝臣も嘆かわしく思うだろうかという気がしました。左を勝
とすべきである。

【注】○はるのころはのどけからまし 『古今集』(五三) に見える在原
業平の歌の下旬。上旬は「世の中にたえて桜のなかりせば」。『伊勢
物語』八十二段等にも見える。○うれたく 嘆かわしく。「うれたし」
は「心いたし」が変化した形容詞。

【考察】この二十八番は、判詞の本文に問題があるが、まず歌について
見る。

左の歌は、花を散らす風に注文をつける形で、風が花さえ散らさず
にくれるなら、花の香りを運び去っても惜しみはしない由を詠む。

右の歌は、尋ねてきた花を見る間も、「春の心はのどけくもなき」由
を詠む。この下旬は、在原業平の歌、

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(『古今集』
五三)

を本歌として詠まれた作であることを示している。ただ、この右歌の
ように詠むと、春の心が落ち着かないという観念は伝わっても、業平
の歌から感じられる花に引かれる心は、あまり感じられないのではな
いかと思う。

俊成の判詞で、中程の空白の前後の部分の本文は、底本では文意が
たどりにくい、傍記した群書類従本によれば、解することが可能に
なる。そのため、当面これによって見ておきたい。

その判詞は、左の歌については、歌の姿を「をかし」と評するが、

問題点として、花の香りは惜しまないと詠むのはいかがかと指摘している。

右の歌については、言葉遣いが「をかし」と思われる点を認める一方、「春の心はのどけくもなき」と詠んだ点を、業平の本歌に比べて「ことの外」のことと評し、業平が知つたら嘆かわしく思うだろうと言っている。これは先にも触れたように、春の心の落ち着かないことが伝わる一方、花に引かれる心が感じられない点を批判したのである。

二十九番 左勝

117 神山をあふぎてみれば白雲のたつは桜の梢なりけり

右

行念

118 山桜梢をはらふ風ふけば花の散りたつなげきをやせん

左歌、姿詞よろしくこそ待るめれ。あふぎてといへる詞ぞ、いうにしもあらぬ事なれど、神山をあふぎてとつづけたるは、あしくもきこえず。

右の、花の散りたつといへる、ことあるやうにて、ことなる心もなきなるべし。左歌はまさり侍りなん。

【通釈】

二十九番 左勝

寂念

117 神山を仰いで見ると、白雲が立つ、と見えたのは桜のこずえの花だった。

右

行念

118 山桜の、こずえを風が吹き払うと、花が散って空に舞うのを、嘆くことになるだろうか。

左の歌は、姿、言葉が結構なように思います。「仰ぎて」と言った言葉自体は、優美ではないけれど、「神山を仰ぎて」と言葉が続いているので、これは不適當とは思われない。

右の歌で、「花の散りたつ」と詠んだのは、子細がある様子に見えるが、特別な意味はないのであろう。左の歌の方がまさっている

でしよう。

【注】○神山 十番の「注」参照。○散りたつ 花の「散り」に、「塵ちり立つ」を掛けて、「払ふ風」と縁をもたせた表現であらう。

【考察】左の歌は、神山を仰ぎ見ると、白雲が立つと見えたが、それは白く咲き続く桜のこずえの花であったと詠む。神山の花の様子を、それにふさわしい端整な調べで描いていると思う。

右の歌は、山桜のこずえを風が吹き払うと、花の「散りたつ」嘆きをするようになるかと詠む。この場合、花の「散りたつ」という語句は、俊成が判詞で指摘しているように、意味ありげな言い様と思われるが、花の「散り」に「塵立つ」を掛けて、こずえを「払ふ風」と縁をもたせた言葉という以外のこととは考え難いと思う。花の「散り」に「塵」を掛けて詠むのは、『古今集』の伊勢の歌、

年をへて花のかがみとなる水はちりかかるをやくもるといふらん
(四四)

をはじめ、他にも用例の見られることである。ただ、これが修辭技巧として右歌でどの程度生かされているかとなると、疑問があると思う。

俊成の判詞は、左歌については、「姿詞よろしく」と評価する。そして「仰ぎて」という言葉自体は「優」ではないが、「神山を仰ぎて」と続けているので「あしくもきこえず」と言い添えている。「仰ぐ」が、上を見る意味ばかりでなく、敬う意味にも用いられ、それが神山に結びつくからであらう。

右歌については、「花の散りたつ」が歌の眼目として意味をもつ言い様に見えるが、さしたる意味はなさそうだと言ひ、左が勝ると判定している。

三十番 左

119 春もまた立帰るべき年しあらば二度花の咲くよしもがな

右勝

重保

120 きよめすなしめの宮人ちりつもる花にまじはる神もますらん

左歌、二たび花のなどいへる姿、いとよろしくこそ侍れ。上の句も、かの春くははれる年だにもといへる歌の心ちおぼえて、をかしくは侍るを、今年も冬の立春のよしは、しるしなどなくは、心得がたくやあらん。

右歌、しめの宮人などいへる。しめのみやもりなどいへるもじづかひ、姿いとをかしくみゆ。初の五文字や、この春ばかり朝ぎよめすなといへるには、にぬやうにきこえ侍らん。但歌さまなど社頭の歌とおぼえて、いとをかしく侍り。以_レ右可_レ為_レ勝。

【通釈】

三十番 左

119 春がまた、(年内に)もどつて来る年があるのなら、再び花が咲くようにならないかと思ひます。

右勝

重保

120 (境内に散つた)花を掃き清めるな、社の者よ、——散り積もる花に親しむ神も、おいでになろうから。

左の歌は、「ふたたび花の」などと詠んだ様子が、大層結構なものに思われます。上の句も、あの「(桜花)春加はれる年だにも」と詠んだ歌の心が思われて、面白いとは見えますが、今年も冬に立春があるといったことは、それを示す言葉などがないと、分なりにくだらうかと思ふ。

右の歌は、「しめの宮人」などと詠んだ言葉遣い、姿が、大層面白く見える。ただ、初めの「きよめすな」という句は、「この春ばかり朝ぎよめすな」と詠んだ歌に比べてみると、及ばないように思われるでしょうか。しかし、歌の様子などが、社頭の歌らしく思われて、大層面白いのです。右の歌を勝としよう。

【注】○春もまた立帰るべき年 春が再びもどることが予定される年。年内の冬に暦法上立春になる予定の年を言う。○よしもがな 手だてがほしい。「もがな」は願望を表す。○きよめすな 掃除をするな。○しめの宮人 神社に奉仕する人。○ちりつもる 花が散り積もる意で

あるが、ここでは同音の「塵積もる」を掛けて「清めすな」と縁をもたせた表現であろう。○春くははれる年だにもといへる歌 「さくら花春くははれる年だにも人の心にあかれやせぬ」(古今集)六一、伊勢。『伊勢集』二二五。『古今集』の詞書に「やよひに閏月ありける年よみける」とあり、「春くははれる年」は閏年で、春三箇月の次に閏三月が加わったことを言う。○冬の立春 閏年は同じ月が二度繰返される結果、一年が長くなって、旧年の冬のうちに立春が来てしまうことになるのを言う。こういう「旧年立春」は、当時の暦法では平均して二年に一度ほどあつて、珍しいことではなかつたらしい。○この春ばかり朝ぎよめすな 「殿守の伴の御奴心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな」(拾遺集)一〇五五、源公忠。『公忠集』五。『拾遺集』の詞書に「延喜御時、南殿に散り積みて侍りける花を見て」とある。

【考察】左の歌は、年末に立春を迎えて春が再びもどる年があるなら、花も再び咲いてほしいと願っている。花に引かれて少しでも長く接したいと思う心を、暦の上の冬の立春に結びつけて見所とした作である。

右の歌は、社の境内に散つた花を掃き清めるなど、社人呼び掛ける形で詠み、その理由として「花にまじはる神もますらん」と言っている。俊成が判詞に指摘するように、散つた花を掃き清めるなど呼び掛ける形をとつた歌の先例は、源公忠の次の歌に見られる。

殿守の伴の御奴心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな(拾遺集)一〇五五、源公忠。『公忠集』五)

ただし右歌は、「きよめすな」と呼び掛ける理由を「花にまじはる神もますらん」と言い、場面を宮廷でなく神社として詠んでいる。

俊成の判詞は、左歌は下句の姿を「いとよろしく」と評価する。上句の「春もまた立帰るべき年もあらば」に対しては、伊勢の歌、

さくら花春くははれる年だにも人の心にあかれやせぬ(古今集)六一、『伊勢集』二二五)

と似た心が認められ「をかしく」思われるとする一方、左歌は「冬の

立春」を詠んでいるので、それを示す言葉がないと分かりにくいだらうと言いついて添えている。

「右歌については、「しめの宮人」などと詠んだ言葉遣い、姿を「いとをかしく」と評価する。ただ冒頭の「きよめすな」の句は、源公忠の前記の歌の「この春ばかり朝ぎよめすな」に比べて及ばないと見ているようである。これは、公忠の歌が散り積もる花を言葉に出さずに想像させた点を巧みと見ていることであろうか。しかし俊成は一方で、右歌が公忠の歌とは異なる「社頭の歌」として、それらしく詠まれている点が「いとをかしく」思われると言いついて、右の勝としている。